

【考古】

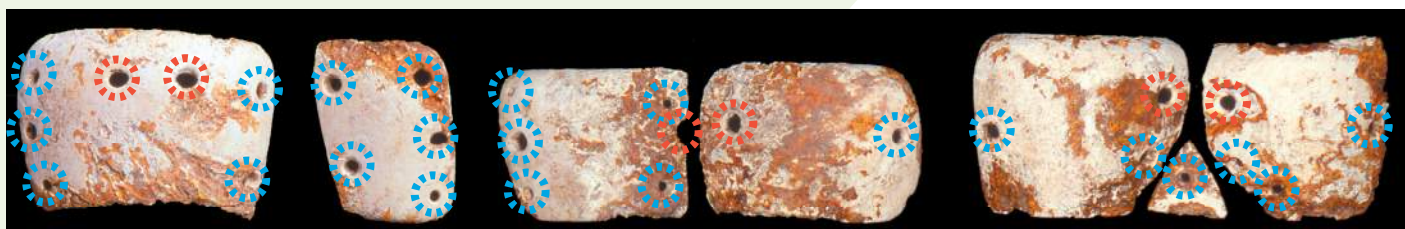
「弥生人と縄文人の出会いのあかし— 2000年前のブレスレット —」

伊達市噴火湾文化研究所 学芸員 青野友哉

伊達市有珠モシリ遺跡からみつかった「イモガイ製腕輪」は沖縄など暖かい海でしか採ることのできない貝で作られたブレスレットです。

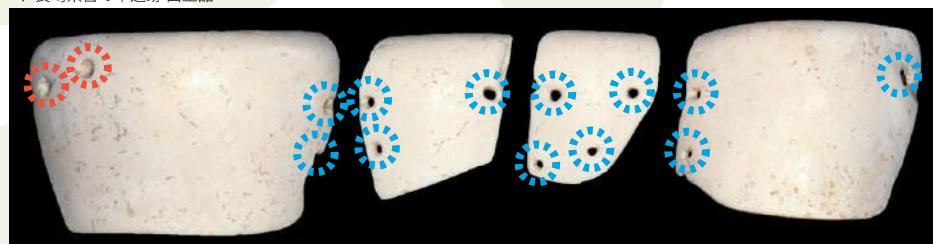
腕輪は約2000年前（本州は弥生時代。北海道では縄文文前半期）に弥生人が琉球諸島から材料を取り寄せ、九州北部で加工し、自らが使っていました。そのうちの一部が日本海を北上して北海道まで運ばれたのです。

北海道でイモガイ製貝輪がみつかったことは、はるか昔に沖縄から九州、そして北海道まで人の行き来があったことを示す大発見なのです。



▼長崎県宮の本遺跡 出土品

▲伊達市有珠モシリ遺跡 出土品



■形からわかること— 2種類の孔

宮の本遺跡の腕輪（写真下）は有珠モシリ遺跡のもの（写真上）と、材質はもとより、大きさも形も同じです。そして何よりも、「2種類の孔」があることも共通しています。腕輪にあいている孔には①紐でつなぎ合わせるための孔（青丸）と②装飾用の孔（赤丸）の2種類があります①。

遠く離れた2つの遺跡の腕輪がそっくりなのは、「同じ時期に同じ地域で作られた」可能性が高い、つまり、有珠モシリ遺跡の腕輪は九州で作られて運ばれたものだといえるのです。

弥生文化
（稲作農耕文化）

■イモガイは誰が採ったか？

このころの琉球諸島は「貝塚時代後期文化」という狩猟採集の社会でした。沖縄県では貝塚時代人のムラからイモガイを貯めていた場所が見つかるので、彼らが採って、弥生人に渡していたようです。

貝塚時代後期文化
（狩猟採集文化）

■参考資料

1860～1907年にパプアニューギニアのラファン諸島で収集された腕飾り。イモガイを紐でつなぎ、赤と白のガラスビーズの紐が飾りとなっている。イモガイ製腕輪もこのような飾りがついていたのかもしれない。

〔国立民族学博物館蔵 ジョージ・ブラウン・コレクション〕
写真：大阪府立弥生文化博物館刊『弥生人の船』2013より転載



■世紀の大発見!

有珠モシリ遺跡は有珠善光寺の向かいの小島にある縄文時代晩期から続縄文前半期(約3000~1700年前)の遺跡です。イモガイ製腕輪は、1988年7月に札幌医科大学の発掘調査によって、男女2体が埋葬された墓の中からみつけられました。調査担当者だった大島直行氏はこの腕輪が「ダイモウイモ」という琉球諸島以南の貝で作られていること、貝を太目にカットして紐で連結した「横型貝輪」であること、似たものが佐世保市宮の本遺跡でみつまっていることを明らかにしました。発見されたときは世紀の大発見として、新聞やテレビで話題になり、NHKも特集番組を制作するほどでした。



▼有珠モシリ遺跡出土品(実物大)



◀垂柳遺跡出土品(実物大)



■新発見!腕輪をマネした石製品

青森県の垂柳遺跡でイモガイによく似た石でできた製品がみつかりました(写真右)③。これは内側にイモガイの特徴である厚い縁が表現されており、中央に飾り用の二つの孔もあることから有珠モシリ遺跡の腕輪(写真左)を真似したものと考えられます。

この発見により、イモガイ製腕輪の伝播ルートは九州から本州北端までは日本海側、それ以北は津軽海峡をぬけて太平洋側を通ったことが明らかになったのです。

■どれくらいの時間がかかったか?

九州で腕輪が作られた時期と青森の石製品の時期、さらに北海道で墓に入れられた時期を調べた結果、有珠モシリ遺跡のイモガイ製腕輪は九州で作られ、ほどなく青森まで運ばれてそこで石製品に真似されました。その後、しばらく青森に留まったのか、すぐに北海道に渡ったかはわかりませんが、約200年後に有珠モシリ遺跡の墓の中に入れられました。つまり、物は人に運ばれてあつという間に遠くまで行きますが、北海道では貴重な腕輪は大切にされ、長いあいだ人々に使われ続けたことがわかるのです④。

約2000年前の日本列島は北の続縄文文化と南の貝塚文化という「狩猟採集文化」と、水田でお米を作る「農耕文化」である弥生文化が同時期に存在していました。

しかし、暮らし方や考え方が違っていても、まったく関わりがなかったわけではなく、人・物・情報が行き来していたことを「2000年前のプレスレット」が示しているのです。

■もっとくわしく知りたい方へ

①「紐ずれの痕」の観察

宮の本遺跡と有珠モシリ遺跡の腕輪にあいている孔を観察すると、①紐でつなぎ合わせるための孔と②装飾用の孔の2種類があります。①はパーツの縁にあけられており、内側と外側の両方に紐ずれの痕があります。これに対して②はパーツの真ん中に2個一対であり、内側にだけ紐ずれの痕があります。紐ずれが内側にだけ残るのは、外側にビーズ付の紐などが付けられていたためと考えられます。

② 腕輪のももとの形

有珠モシリ遺跡の腕輪は7つの破片からなっていますが、もとは3つのパーツだったと考えられます。輪切りにしたイモガイの半周分が一つの部品で、2個セットで一周するブレスレットだったはずです。

それが時間とともに割れてしまったのですが、補修用の孔をあけて紐でつなぎ、使い続けました。ですから、孔の種類を正確に言うと①連結用、②補修用、③装飾用の3種類あったといえます。

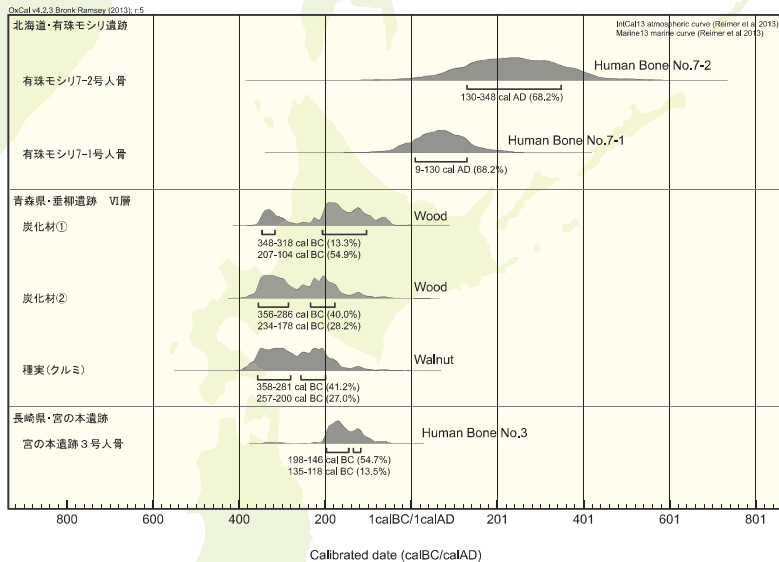
③「新発見」の経緯

2013年に東京大学大学院の設楽博己教授と北海道大学大学院の高瀬克範准教授が青森県田舎館村の垂柳遺跡の出土品を見学した際、凝灰岩製の石製品がイモガイ製の腕輪に似ていることに気づきました。この石製品は2004～2006年の発掘調査で弥生時代の水田近くから出土し、2009年に報告書が刊行されていました。石製品はイモガイ製よりも大きく、連結用の孔もありませんでした。おそらく腕輪ではなく、置物かお守りのように使われたのかもしれない。

④ 年代測定

有珠モシリ遺跡の出土品は重要文化財に指定されており、腕輪を壊して年代をはかることはできません。そこで、同じ墓に入っている人骨の年代を炭素14年代測定法で調べました。これにより、腕輪が作られた年代はわかりませんが、「いつまで使われたか」がわかります。結果は「68.2%の確率で紀元9年～130年までのいつか」だと出ました。

宮の本遺跡でも人骨をはかり、「54.7%の確率で紀元前198～146年のいつか」と出ましたので、約210年も時間差がある、つまり使われ続けた期間（伝世期間）が長いことがわかりました。



【参考文献】

AONO, T., DATE, M., OSHIMA, N., NAKAMURA, K., DODO, Y., WAKEBE, T., 2014.9.23: On the Long-Distance Spread of Cone-Shell Bangles across the Japanese Archipelago, 12th International Conference of Archaeozoology (ICAZ2014) Abstracts.

青森県田舎館村教育委員会2009『史跡垂柳遺跡発掘調査報告書(13)』

大阪府立弥生文化博物館2013『弥生人の船』

佐世保市教育委員会1980『宮の本遺跡』

高瀬克範2014「東北北部の初期弥生文化」『縄文！岩手1000年のたび』大阪府立弥生文化博物館

百々幸雄2005『平成14年度～平成16年度科学研究費補助金研究成果報告書 北海道縄文人の系譜論的・生活論的研究ー有珠モシリ遺跡出土人骨を中心にー』

北海道伊達市教育委員会2003『図録 有珠モシリ遺跡』

【実物を見たい方はこちらへ】

伊達市開拓記念館（伊達市梅本町61-2）0142-23-2061

JR伊達紋別駅から道南バスで開拓記念館前下車、徒歩5分

一般260円／中高大学生200円／小学生130円

開館時間 9:00～17:00

期 間 3月1日～11月30日（期間中無休）

【謝辞】：この成果は平成25年度笹川科学研究助成によるものです。

Newsletter 【噴火湾文化】 第9号

●編集・発行 伊達市噴火湾文化研究所

〒052-0031 伊達市館山町21番地5

TEL. 0142-21-5050 FAX. 0142-22-5445

E-mail bunka@city.date.hokkaido.jp

URL <http://www.funkawan.net/index.html>

●印刷 (有) 共立印刷

〒052-0022 伊達市梅本町4番地4

TEL. 0142-23-2175 FAX. 0142-25-1971

2015年3月31日発行